

## 擦れ枯らし

漆の樹は、おのれに少しでも触れた枝はことごとく枯らしてしまうという。従って、漆の樹は、常に周囲に一定の空間を占めて独立するのだそうだ。

これが相手が同じ漆となると大変なことになる。共に相手を敵として引くことがないから、どちらかの樹が完全に枯れ果てるまで戦うのだという。

初子にも漆の樹に似た毒と強さがあった。

永年苦勞の境遇を転々として、身の皮も心の皮も厚くなるのを「擦れつ枯らし」というが、あるいはこの漆の話に語源があるのだろうか。

初子は耕之輔から、彼が捺印した離婚届を受け取った時、思わず手が震えた。離婚のせいでではなく、耕之輔から突き付けられた怒りからだった。

初子の意識には、この結婚の失敗を自分のせいにする気は毛頭ない。悪いのはあくまで耕之輔なのだ。美杉とのことにしても本を正せば耕之輔が売れる作品を作らず、それでも浅谷窯維持のために売っていかなければならなかったからだ。危険な道を選ばせたのは耕之輔ということになる。

夫婦のことにしても、耕之輔が子供を作することを拒否し、いつか夫婦らしい夜もなくなっていくからではないか。その上、夫は越後の機織り女と浮気をしている。それなのに何でこんな離婚届など突き付けられなければならないのだ。

確かに初子の論理も一面の真理ではあった。

元々、もし自分が耕之輔の仕事に理解を示し、彼の出生の苦悩を思っただけでいたらなどと、考えてみる女ではない。

万一反省するとしても、その反省は常に自分を中心においてのことである。全てが自分に都合のいい処からスタートする流儀なのだ。それは特技とも言える才能だった。

もし、耕之輔に非の打ち処がなければ、彼女は「貴方の教育が悪かったからよ」と言うだろう。

それまで、別れた方がマシだと考え、耕之輔にもそう告げたのだが、いざそんな形で突き付けられると、初子の血液は逆流した。

届は封筒もろともその場で破り捨てた。耕之輔の送った離婚届は彼女の敵がい心を煽つ

ただけのことだった。

初子は津坂病院を強引に退院すると、その足で北白川の産婦人科に身を寄せていた。勿論、正枝と相談の上で、お腹の子供を墮ろすためだったが、美杉にはそう告げてなかった。何故自分だけがこんな思いをしなければならぬのだ。耕之輔も美杉も同じ思い、いや、もっとひどい苦しみを味わうべきだ、というのが初子の根元にある。

個室の扉がノックされた。三つ続けて叩くのは長谷院長に決まっている。

「どうですか、ご気分は？」

院長の挨拶は何時も同じだった。

「お蔭さまで……」

初子の答えも決まっている。

「今年もいよいよ迫りましたなあ」

そう言いながらも手首を握っている。院長の手は何時も驚くほど冷たかった。

「お正月はどうなさいますか」

別に訊いているわけではない。脈をとる間の照れ隠しのようなものだ。

長谷院長は還暦を三つ四つ越した好々爺タイプの男で、産婦人科ではやるのはこの種の男という顔をしていた。全てが柔らかく、肌までスベスベしていて、決して則のりを越えることがない。

「もう、何時退院なさっても構わないと思いますが……まだ不安はありますか」

「ええ、まだ少し。ハッキリしたものではありませんのですけど」

これも何度も繰り返されてきた会話だった。昨今の産児減少から病室は空いている。初子にも差し当たり退院を急ぐ理由はない。双方にとって不都合はなかった。初子としては、美杉へのお灸にも、少し重症に見せておきたい思いもある。

「昨夜はお産がありましたのね」

「ここまで聞こえましたか。近頃のお母さんは基礎体力に欠けるといいますか我慢がないといふか、結局メスを入れてしまいました」

胎児を墮ろした女にとって、赤ん坊の泣き声がこんなに応えるとは思ってもみないことだった。初子は明け方、久しぶりに涙を流した。

「今度のことは仕方ないとして、お子さん、どうしてお作りにならなかったんです？」

「どうしてでしょう、夫を好きになれなかったからでしょうか」

初子は口に出してから、それが本音のような気がしていた。

美杉が顔を見せたのは、朝した化粧を簡単に直して、さあ出掛けようとした時だった。

「なんだ、お出掛けかい？」

「病院食じゃ身が持たないのよ」

「そりゃそうだ、栄養だけは付けなきゃあ。……じゃ付き合おう」

美杉は初子の顔色がいいのにホツとしているらしく機嫌が良かった。

「何が食いたい？」

扉を開けようとして、美杉は振り返りざま初子を抱き寄せた。立っての抱擁は美杉の背を一層短くした。惰性の抱擁には輝くものがない。同床異夢の、それでもそれぞれの思惑を抱えた長いキスだった。

初子は連れて行かれたうどんすきの店で、美杉が呆れ、

「おい、大丈夫かい」

と心配するほど食べた。

初子は力うどんを注文し、残り少なくなったところで、天麩羅うどんを頼んで、待ちきれない様に一気に平らげた。

美杉はあきれて初子の異常な食べっぷりを眺めていた。尋常とは思えない。

「近頃少し動くような気がするの、気のせいかも知れないけど」

大きなどんぶりから眼だけ上げてニタリと笑う。お腹の赤ん坊のことである。

「そうかい、もう動きよるのか」

美杉が落ち着いているのは、墮ろした事実を知っているからである。こ奴、何時までこの俺を欺しよるつもりやろ、と美杉には面白がっている節もある。

「気のせいかも知れないけどね」

重ねていうのは、嘘の不安があるからだろう。

「どうしても産む気いかい？」

美杉は困惑をあらわにして訊いてみる。

「だから言ったでしょ。決して先生には迷惑かけないから安心して。後でお尻を持ち込んだりはしないから」

「そうはいかんよ。男には責任ちゅうものがあるよってな」

「ほな、責任とって貰おうかしら？」

無邪気な顔をして上目遣いに美杉を見詰める。

「私の私生児として立派に育ててみせるから……安心して」

それを聞いて美杉も大袈裟に頭を抱えてみせる。虚々実々、全てが嘘の上に成り立っている二人だった。

「ああ、おいしかった。御馳走さまでした」

「どう致しまして。うどんで済むならお安いもんやけど、半分はお腹の赤が食べよったんやろな」

「そうなのよ。私もこんなにお腹空くのって初めて。これからもずっと続くのかしら」

「ま、つわりがひどいのよりええがな。つわりらしいものは無かったんかい」

「あったわよ。全く男の人は無責任なんだから……。今その分栄養を取り戻してるんじや

ないの」

「なるほどそうか」

美杉は顔色一つ変えない度胸に感心しながら、機転の早さにも感心していた。

美杉とは店を出たところで右と左に別れた。

風は無かったが、気温はやはり冬の午後だった。

初子はひとり病院へ向かって歩きながら、虚しさを持って余した。帰って見たところでテレビとベッドが待っているだけだ。明日も明後日も見えてはこない。

初子は流してきたタクシーに思わず手を上げていた。

「高台寺へ……」

行き先を決めたのはタクシーへ乗り込んでからだった。

長い間、心に何にも触れていない不安が馴れ親しんできた高台寺を選ばせたらしかった。タクシーは巧みに裏道を抜けて円山公園から八坂神社へと出た。

何処の道にも人々が動き、人の匂いと生活があつた。腰を曲げて歩く老婆にも、二階に出された干し物一つにも生な感情がある。そんな何処にでもある景色を初子は珍しいものでも見るように眺めた。

車が急に坂を登り、広い視野が開けたと思つたら高台寺の駐車場だった。

初子は高台寺坂の定宿を告げたつもりだったが、高台寺と告げれば寺へ着けるのが当然

だった。

考えてみれば、定宿は自殺騒ぎから一度も顔出ししていない。突然行くのはかなりの勇気がいることだった。

回遊式の庭園に観光客は少なかった。初子は時間をかけて歩いた。もう何度も来て馴れている庭である。東山を借景にして、赤松の大木の幹が心字池に鮮やかに映っていた。

松籟が人恋しさをつのらせたが、山にも人影はなかった。

茶室の裏で、初子はそつと涙を拭った。叫びたい思いと過ぎ去った時間への哀惜が孤独となつて交錯した。

振り返ると、言葉を交わす者もない淋しきは予期せぬ厳しさだった。

帰りは細い山手の路地を選んで歩いた。

後ろを付けてくる男に気付いたのは公園裏の人氣がない林道でだった。皮のジャンパーを着た男だった。

小走りに先を急ぎながら、胸の底が痛くなった。

途中から、町家の路地へ駆け下り、タクシーを拾って病院へ辿り着くと、もう身も心もクタクタだった。

院長が夕方の回診にやって来たのは、冬の日が暮れようとする薄墨の頃だった。

「奥さん、心配させるものじゃありませんよ」

「済みません。お捜しになったのですか」

「奥さんは要注意の患者さんですからね」

長谷院長の言葉は別の意味で初子には応えた。

「私って、そうなんですか」

初子は、思わず院長の胸にすがっていた。中年の看護婦を顧み、困った顔で背中を軽く叩いてくれた院長は、その夜ひとりで個室を訪ねてきた。

消灯後、初子はベッドのスタンドランプで本を読んでいたが、扉に軽いノックが三つ続いた時、予期した通りだと思った。別に誘ったわけでも期待していたわけでもなかったが、何かそんな予感があった。

長谷院長は和服の上に白衣を羽織っていた。渡り廊下でつながる自宅からやって来たに違いない。

「気になる患者があつてね」

言い訳のように言いながら、もう初子の脈をとっていた。それが如何にも自然だった。

「睡眠の方はどうです？」

「寝付きはいいんですけど、何だか眠りが浅くって、夢ばかり見ますの。それも怖い夢が多くて……私、怖くて怖くて」

猫の甘えた声になっている。怖い夢は事実だった。この人は何でも知っている。医者と患者とはいえ、恥ずかしい軀の隅々まで晒したことが性的な甘えになって現われていた。

「センセイ、お薬頂けません？」

女の甘えで訴えている目が自分でも分かった。

「本当は薬は控えたほうがいいんだけどね……では、後で当直に持ってこさせましょう」  
脈を取る手首を初子のもう一つの手が押えていた。しっかり意思を伝える力だった。

「お願いします。助かります」

院長はその手をそつとはずすと、寝ている初子の額に置いた。やはりひんやりと冷たい手だった。

「……それから、今日のようなことは困りますよ」

「一寸、買い物に出掛けただけですわ」

「違いますよ、私の胸で泣かれたことです。看護婦たちが誤解しますからね」

「あら、申し訳ございません。私、先生に迷惑お掛けしたのかしら」

「いや、そんなことはないけど、お互いに無いことを疑われるのは嫌でしょう」

長谷院長は優しい目で見下ろしている。初子は自分の目が充血しているのがハッキリと分かった。もうひと言葉優しい言葉を掛けられたら泣き出していたに違いない。この院長は物腰が静かで、男を感じさせないのも安心して頼れる一因になっていた。

「昼にも言いましたように、もうそろそろ退院を考えられたら如何でしょう。貴女はもう精神的にも肉体的にも充分に健康なんだ」

「私のこと、お見捨てになりますの？」

「ここにはいろんな目もあるしね」

静かに院長の顔が近づき、額の辺りに唇が触れた。その首を初子の手が巻いて強引に唇に持って行った。

成り行きだったと初子は思う。自然にそうなっていた。院長はこれも静かに風呂敷でも解くようにして外すと、その両手をそっと毛布の中に戻した。

「お大事に……」

院長は事務的に言うど何ごともなかったようにスリッパを鳴らして出て行った。

「おやすみなさい」

返事はなかったが、初子は久し振りに救われている自分を感じていた。枕元のスタンドランプを消すと青い天井が浮き上がってくる。海の底のやさらぎのような安定があった。

今夜は久し振りに眠れそうだと思った。

唇にまだ院長の感触が残っていた。明らかに先方からの反応もあった。それだけで今は満足すべきだろう。

ドキドキするものはなかったが、恋の甘さには変りなかった。

その余韻を楽しみながら、ようやく睡魔が襲い始めた頃、突然、看護婦がやって来て明かりを点けた。

「お薬です。……寝られないんですか」

「あら、忘れてたわ。どうも済みません」

年は初子と同じくらいだろうか。昼間見掛けたことがないところをみると、夜勤専門の看護婦なのだろう。

「院長先生への御用はすべてナースセンターを通して貰わなければ困ります」

明らかに叱る言い方だった。初子もムツとしてにらみ返す。

「そうですか。相済みません。一寸、廊下でお会いましたものですからね」

愛想のない看護婦は明かりを点けたまま出て行った。

「あの看護婦も院長先生のこと好きなのかしら」

初子は叱られた腹いせに、退院して院長を呼び出し、密かに会っている自分を想像してみる。また、美杉との関係の繰り返しのような気もしないではなかったが、何もないよりは救われる想像だった。

その裏側に、とことん堕ちて、耕之輔や美杉を見返してやりたい思いがあることに、彼女自身まだ気がついていない。

朝の回診の時、初子はその知らぬ風をよそおって訊いてみた。

「院長先生、私、何時退院出来ますでしょうか」

「ほう、元氣が出てきましたね。……考えておきましょう」

院長は昨夜の表情を緞塵も出さなかった。

種を蒔いて院長からの返事を待つのだ。

初子は何かわくわくし、母に電話を入れて、退院が近いこと、耕之輔とのほとぼりがさめるまでもう暫く京都に残る旨伝えた。

「顔を見るのも嫌だからって、そう何時まで逃げてばかりもおれんよ。いずれは話し合わんと」

「もう話し合うことなんか何にも無いと思うけど」

「そうも行くまいがね。一度帰ってケリつけんさい」

「あの人まだ浅谷窯に居るの？」

「そらそうよ。何たって浅谷窯の当主だもん。お父さんは少しでも穴埋めして貰わんとと言うとつてよ」

「清水が後を継ぐんじゃないの？」

「それはこれからの話。それよりね、久美子が昨夜、突然清水さんと一緒にになりたい言い出しよつてね。あの子は何時もたまげさす（驚かす）子だけ……」

「久美子が？ 清水と!? じゃ、あの子が浅谷窯の女将さんってわけ？ ……お父さん何

て言ってるの！」

「昨夜は、それは怒つてなさつたけど、言い出したら引かん子だし……今朝は、お父さんもその気になってなさつたみたい」

この話は初子には大きなショックだった。

内情はともかく、世間では浅谷窯の名は、萩の窯元として充分に通用している。初子にしても、伝統窯の窯元の奥さんとして遇されてきた。特にお茶の世界ではそうである。

初子は皮を剥がれた兎の寒さを感じていた。

「ふーん、久美子がねえ。あの子ならありそうなことだわ。清水の何処がいいんだろう」

口にしてから、負け惜しみに聞こえるのが情けない。父の明信には計算があるに違いなかった。伝統窯一つを手に入れるにはもつてこいの条件なのかも知れない。

足許を掬われた感じだった。それ以上に枠の外に押し出されていく我が身のあわれが染みた。

耕之輔と別れることが、彼女の社会的位置までからめ取られることとは思ってもみなかった。今、確実にからめ取られようとしている。清水が継げば浅谷窯も勢いを盛り返しそうな予感があった。清水と久美子によって盛り返されていく浅谷窯を、失敗者として側で見なければならぬのは、勝ち気な初子には、何ともやりきれないことだった。

初子はしかし、敗北を認めるより、新たに自分中心の世界を見つけて逃げ込むことに急

な女である。

長谷院長とのことも、無意識に自分中心世界を早く構築しようとする焦りなのかも知れなかった。

院長がやって来たのは、午前の外来診察が終わった正午すぎだった。予想通り院長ひとりだ。

気がつくともう冷たい手が初子の手首を掴んでいた。

「今朝お申し出の退院の件ですが、暫く通院なさるとして、落ち着き先はおありなんでしょうか？」

「いいえ、そんなものあるわけございません。何処かいいお部屋ありませんでしょうか？」

初子は甘えを隠そうとしない。男の弱点を知りつくしたこびだった。

「さあ、探せば無くもないでしょうが、お好みもおありでしょうから……知り合いに業者がいます。よく相談してみてください」

「助かりますわ。京都の事情はまるで分かりませんので、本当に困っておりますの」

そして、もう一言つけ加えるのを忘れなかった。

「女ってどうしてこうも駄目なんでしょう」

如何にも心細そうな声が出るのが、自分でも可笑しかった。女の芯から本能的に出てくる声だった。

院長は脈を取っていた初子の手を離す時、その手を彼女の下腹に戻した。初子はそれを院長の意思と確認した。

「私、こちらの病院から余り遠くないほうがいいわ」

明らかに裸の女を晒していた。

「そうですね。きっと適当なところが見付かるでしょう」

長谷院長はあくまで涼しい目を崩さない。

「……ではお大事に」

初子は満面に親しみを込めて見送ったが、院長は後ろ手に扉を閉めただけだった。

夕方にはもう革ジャンパーの若い男がやって来た。

男は分厚いファイルを三冊抱えてきて、初子の希望を訊きながら結局は彼の思い通りの物件を押し付けた感じだった。

上賀茂神社から程遠くない山手のマンションで、十二部屋の三階建てというから、規模も建物も見当がつく。空いているのは二階の階段から一番遠い部屋だという。家賃も頃合良かった。

「とにかく一度見て下さい。明日の三時頃、都合如何ですか。お迎えに上がりますが」

初子は男を送り出しながら、これで美杉と切れると思った。心残りもなしではなかったが、相手の心根が見えている以上、深追いはしたくない。耕之輔と別れるからにはもう彼



にすぎる必要はない、というのが表面の理由だったが、これ以上付き合ってもお互い傷つけ合うだけだということも分かっている。勝ち気な初子としては相手から切り出される前に自分から切りたかった。

美杉とは所詮肉の交わりであった。肉の代わりには肉が要る。

初子自身、長谷院長とのこともいずれ美杉と同じ繰り返しになりそうな予感があったが、とりあえず渴きを癒してくれる男の匂いが欲しかった。その為には先のことは考えないようになっている。

初子は小机の引き出しから便せんを取り出すと、耕之輔に手紙を書こうとボールペンを持ったが、書き出しが分からなかった。

書くこともなかった。本当は越後の女に嫌味の一つも書きたいのだが、住所さえ分からない。河原町四条の「吉竹」に訊けば分かると思ったがそまでの情熱はない。書いてみたところで何も生まれてはこないことも何処かで分かっている。相手を詰なめることはそのまま自分を暴くことだった。

初子はその夜、夢を見た。

日光の竜頭の滝を滑り落ちる夢だった。

竜頭の滝を見たのは高校の修学旅行の時だった。

その時、華厳の滝も見たのだが、変に竜頭の滝の方が記憶に残っている。

それまで、滝は一気に落ちるものだと思っていた。それが竜頭の滝では水が斜面の岩を流れ落ちて行く。溪流と言っても可笑しくない流れだったが、流れているというより、やはり落ちていた。

当時は友だちと「これでも滝なの？」とか「滑り台みたい」とか言ってバカにしたものだったが、誰かが傍の木の葉を千切って流すと、葉っぱはもまれながらも止まることなく何処までも落ちて行った。滝壺に落ちた葉っぱは一回転して、留まるかと思えて再び下の岩肌へと滑り落ちて行く。その葉が更に下の岩肌に現われ、小さく消えていった。

自分の悲鳴で目を覚ましたらしく、胸元に冷や汗が流れていた。  
修学旅行の頃は、何一つ汚れを知らぬ少女だった、と思う。つまらぬことに一喜一憂し、よく笑ったり泣いたりしたが、目だけは上を向いていた。

あの頃は何を見、何を夢見ていたのだろうか。  
常夜灯の明かりが扉の上のはめ殺し窓から鈍く射しているのを、初子はぼんやりした頭で眺めていた。

少なくともあの頃はこんな人生を思い描いてはいなかった。憧れていた大人の世界はもっと明るく素晴らしい筈だった。今、取り返しつかないことが山ほどあり、その分、失われた時間とともに湯垢となって軀にべっとり付いている。拭いても拭いても落ちない湯垢だ。

鯉の稚魚はあの滝を登るといふ。落ちる魚と登る魚の差がどこでつくのか、初子はそんなことを漫然と考えていた。

目を閉じてもなかなか寝つかれなかった。

久しぶりに雲の走る寒い日だった。不動産屋の男は約束よりかなり早くやってきた。初子はライトバンの助手席から久しぶりに賀茂川の流れを眺めた。

対岸の河川敷を犬を散歩させている老夫婦がいる。トレパン姿の若者がジョギングして行く。

昨夜の竜頭の滝を落ちる夢が思い出された。

これからは一人で生きていくことになるだろう。いずれ服部の家から資金を出して貰い、小さな商いでもしていくことになるのか。それでも山口の片田舎で、他人目に晒されながらひげ目を感じて生きるよりはマシに思えた。これまでの人脈や実績から、茶道具を商うことになるのだろうか。賀茂川堤をひとり風呂敷包みを抱えて歩いている姿を思い描いていた。

男の案内したマンションは上賀茂神社の対岸を更に上った山手の高台で、窓からは洛北の屋根の連なりから比叡山までが一望出来た。正伝寺や光悦寺にも歩いて行けるといふ。

初子はそれだけで、ここと決めた。そんな捨て鉢が新しい出発にふさわしい気がしていた。

「ありがとうございます。私は、これから手続きに回ります」

「あら、連れて帰って下さるんじゃないの？」

「間もなく院長先生がお見えになります」

男は馴れた調子で鍵を渡して寄越した。

こういうことだったのか、と初子はようやく気がついた。

レースのカーテン越しにライトバンが坂道を下って行くのを見送りながら、初子は墮ちるところまで墮ちた自分を見ていた。

その頃、阿紀は京都駅に降り立っていた。

徳島に行く途中、京都に寄ることになったのは、耕之輔からは是非にと頼まれたからである。

電話での話では、是非会って欲しい人物がいるという。耕之輔は、父親代わりに思える人、と表現したが、それが彼の妻が収容された病院の院長と聞いては頭が混乱するのも無理からぬことだった。先代からの知り合いだったことが今回初めて分かったというのも、にわかには信じ難い話である。

ただ、最初は耕之輔も京都まで出て来て一緒に会うという話だったので、余り重くは考えていなかった。それが突然耕之輔が来れないことになり、一人で会わねばならないこと

になったのだ。

それは耕之輔がついてくることを、先方が拒否した為と後で分かった。

阿紀は、耕之輔の相手として自分が試されるのを感じて愉快ではなかったが、耕之輔と結ばれればいずれは会わねばならぬ相手であろう。これも浮き世の義理か、と諦めかけた日、当の病院長から直に手紙を貰った。

万年筆らしい太いペン書きの封書だった。いかにも風格のある大きな字だったが、中身は神経の行き届いた懇切なものだった。

突然の手紙の非礼を詫びた後、先代耕之輔と囲碁友だちだったこと、耕之輔からも相談を受け、彼の将来について心配していること、話に聞けば徳島へ行かれる由、耕之輔のこれからについて相談したいので、是非京都にお立ち寄り頂きたい、という趣旨のことが懇願調で書かれていた。

その後、二三の電話のやり取りがあり、ホテルは駅前津坂が手配してくれたものだった。

フロントへ行くと、津坂からの電話メッセージが入っていた。

「お部屋でお待ち頂くようにとのことでした」

六階の部屋から西に傾きかけた太陽に、東寺の五重の塔が黒くまぶしかった。

耕之輔の将来についての相談だと言っても、阿紀が瀬踏みされることには違いない。

時計を見ると一時間近くある。阿紀は迷った末、思い切って着物を着ることに決めた。

急いでシャワーを浴びると、ぬるめの湯は白い脂の肌に軽くはじけてバスタオルで拭いているのが、大鏡に等身大に映っている。阿紀は一瞬おのれの裸身にみとれた。

明日には耕之輔に会える。そう思っただけで上気してくる。

「あんた、少し現金過ぎない？」

電話は約束の五時きっかりに掛かってきた。

「なに、恐れることはないわ」

帯を叩いて背筋を伸ばした。

津坂はロビーの中央に突っ立っていた。

「藤波阿紀さん……だね」

「はい、お待たせ致しました」

「外に出ますが、いいですか」

阿紀がうなずく前に津坂はもう歩き出している。表に車が待たせてあり、運転席に女性が待っていた。表通りへ出たところで、津坂が分からぬことを口走った。

「よかった……！」

「はあ……？」

「いや、貴女がいい人なんで安心したんです」

「まだ、何もお話してませんわ」

「話してみなきや分らんようでは困るんです。若い者は可笑しなもので平気で捕まえよるからね。可笑しな女だったらどうしようと思ってたんです」

阿紀には返事のしようがなかったが、耕之輔への思い入れはよく分かった。

「先生ッ、少しお言葉が」

運転席の女が口を挟んだ。

「それより、紹介して下さる約束でしょ」

「あ、コレは家でも一番注射のへぼなナースで青島典子」

「又それを言う、五年も前の話じゃありませんか、もう……青島です」

「藤波阿紀と申します」

阿紀には、緊張を和らげようとする二人の気配りが嬉しかった。

「先生が口説いたりしたら、直ぐ言って下さい。私から奥さまに報告しますから」

「ああ、言え言え。ちつとも怖かない」

車が狭い路地を抜けていくので阿紀には何処を走っているのか皆目見当もつかない。八百屋や雑貨屋の前では店の匂いが伝わってきそうな狭さで、それが如何にも京都だった。

着いた処も狭い路地で、北山杉の丸柱を二本立てただけの門から二つ三つ石段を上った玄関に墨で「紫門」と小さく書かれた家だった。

「では、ごゆっくり……」

運転の青島典子はそのまま帰り、座敷に通されたのは阿紀と津坂だけだった。

茶室風なしつらえで床の掛け花に白つばきが一輪ぼつんと投げ込まれている。侘助だった。

阿紀は着物を着てきてよかったと思った。

「酒は何にしますか」

「……私は頂けませんので」

「ウソつきツめ。耕之輔君からみんな面白いとるよ」

「まあ、何をお聞きになったんでしよう」

阿紀は耕之輔の軽口を恨みながら顔を赤くした。

「まあ、ようお似合いですこと、紅花染めどすな」

二、三年前に還暦を迎えたと見える女主人は、阿紀の着物を誉めた。

「ありがとうございます」

「おい、それ以上滅多なことは言うなよ。……この方は、その道のオーソリタイーだ」

「とんでもございません」

「へえ、これ御自分で染められましたの？ 道理で……お似合いの筈だわ。……ところでセンセ、その大そりいた、って何ですの？」

「これだ。この婆さんは、子供の頃、この辺りのガキ大将でね、僕なんかとても近くへ寄せても貰えなかったもんだ」

「それが今ではセンセの四号、いや五号どしたかな？」

「六号だよ」

「あれ、又上に一人入りよりしましたんぞすか。こらしっかりせんとあきませんな」

如何にも馴れ親しんだ幼な馴染みだった。

「仰せの通り、あれ掛けときましたえ」

女主人が振り返ったのは床の間の掛け花入れだった。

「それ言うたら実も蓋もないがな」

「先代の耕之輔先生でしょうか」

「そうです。分かりますか」

阿紀にも先刻から気になっていた萩焼だった。

鶯色の壁をバツクにその掛け花入れは、控え目に侘助を支えていた。

「囲碁に勝って先代から巻き上げたものです」

津坂院長は得意気に鼻を撫で上げた。

「この時は、盤面がとても美しくてね。終わってもお互い勝ち負けを忘れて見とれたものだった。碁はなさるかな？」

「いいえ、不調法でして……」

「囲碁というのは一種の陣取りゲームなんだが、目が敵の陣地に向いている相手は一向に怖くないんです。相手の手など追っていない、碁盤全体をぼんやり眺めているような目は、これは怖い。何しろ自由奔放なんだから」

「先代耕之輔先生がそうだったのですね」

「シンとしたとても静かな碁だった。しかし、それに勝ったんだから、私も大したものだ」

「……それがおっしゃりたかった」

「そういうこと。……とても奇麗な石を打つ人だった。心が澄むと音まで美しい……」

ふたりは並んで床の掛け花入れに見入っていた。

「……会えて本当に良かったと思える人でした」

津坂院長は激情の人らしく、鼻水をすすっている。

「当代のこともこの部屋で聞いたんです。御存知ですね、出生の時のことですが」

「はい、聞いております」

「この静かな心境も一朝一夕に出来たものではないんだ。悩み苦しんだ拳句に克服したものです。私ども常人にはとても出来ることではない」

「周囲に当たられるようなことは一度もなかったとか……」

「あの人ならそうでしょう」

「当代もとても尊敬していらいっしやいます」

「勿論貴女は会っていないわけだね」

「はい」

「尊敬だけじゃ困るんだなあ」

「……？」

津坂は黙って掛け花入れを見つめていた。

「これが萩焼の伝統というものです。先代は萩の正統を踏襲してその粹に迫った人だったと思うんだ」

女主人が料理を運んできて、話は途切れた。

「今、この掛け花の話をしていたんだ」

「坂戸先生はお優しい方でしたさかいに、私にくれはりましたんどす」

「あら、お話が違いますわ」

「次には私が負けてね、取り戻されてしまったんだ。……なに、ここに納まったのは萩へ持って帰るのが面倒だっただけの話さ」

女主人が目を丸くして抗弁した。

「とんでもない。この掛け花はうちに下さりましたんどす。坂戸先生は私のこと好いてはりましたよって」

「へえ、……都合よう話づくりよるわ」

「ほんまどす。先生が知らはらへんだけや。この先生は坂戸先生のこととなるとムキにならありますねん。御自分が一番の理解者でないど気が治まりませんのや」

「先代の人格下げるようなこと言わんといてほしい」

「それ、どういう意味どす？」

幼な馴染みの軽口を阿紀は羨ましく聞いていた。女主人が去ると津坂は少し改まって訊いた。

「ところで当代の作をどう思いますか」

「申し上げました通り、陶芸のことはまるで分かりません。ただ、私も染織の方で悩むことが多いものですから、お悩みになっっていることはよく分かります」

「惚れた人としたらそうだろうな。しかし、人の悩みなど押し付けられたんじや、持たされる側はたまったものじやない。そう思いませんか？」

「そうでしょうか。私には……」

「いや、これは訊く相手を間違えた……今貴女に何を言っても、素直には聞いては貰えない。それも当然だ。しかし、当代のあれはとても日本伝統の陶芸と言えるものじやない」「どうしても伝統を継承しなければならぬものでしょうか」

「……でしような、伝統窠を名乗る以上は。先日、観て欲しいと言って茶碗と水指を送つてみえたが、彼の目指す処は鬼手という奴で、全て生なまなんだ。練れていない。粒あんのぜんざいかも知れんがしるこではない。「しるこ」で名を売ってきた老舗が突然「ぜんざいだ、と言われても客は戸惑うばかりだ」

「ぜんざいにはぜんざいの良さがあるという風にはお考え戴けないでしろうか」

「今の耕之輔君のやり方を押し進めて行くとオブジェに行きつく。日常の中に取り込んでいく陶器とオブジェでは本質的に別物だ」

「御意見は分かるような気がします。でも当代が志向していらっしゃるのは、鬼手です。鬼手はお認めになれないということでしょう」

「さて、そこが困ったことなんだよ。……貴女としては彼のやりたいことをやらせたい訳だ」

「やらせたいなんて……あの方の精一杯のお仕事を願っているだけです。一度しかない人生ですから」

「一度しかない人生ネ」

津坂院長は皮肉っぱさを隠さなかった。

「可笑しいでしょう」

「ま、お若いから当然でしょう。……しかし、一度しかない人生だから鬼手でいいという

のは、ちと短絡過ぎるとは思いませんか」

「短絡的でしょうか。鬼手でいいなどと言っているではありません。あの方は積極的に鬼手で行きたいとおっしゃっているのです」

「どうして先代の突き詰めた道を試みようとしなんでしょうね」

「それは無理というものです。あの方には坂戸家代々の血も先代の血も流れていないんです。お父上の器用さは望む方が無理というものです」

「だから駄目だって言うんだ！」

津坂の眉間に怒気が逆巻いていた。

「先代のこうした仕事器用と見えている間は耕之輔君は駄目だね。保証してもいい。先代の何処が器用なんだ。この掛け花はそんないい加減な軽さで出来たものじゃないよ。命懸けで手に入れたものなんだ。悩み苦しんだ挙句に自分で掴み取ったものだ。だから見る人の心を打つんだよ」

津坂は言い終わって、興奮から息苦しそうに胸の辺りを掻きむしった。発作を起こしかと心配するほどだった。一息大きく息をすると更に続ける。

「無器用だから鬼手をやる、それじゃ最初から負けじゃないか。伝統的なものもちゃんと出来る、しかし、鬼手こそ自分の道だと信じるからやる、それでこそ本物なんじゃないかね。そう思いませんか」

津坂はやつと落ち着きを取り戻したようだった。

「おっしゃることは分かります。でもあの方にしてみれば、年齢から言って残された歳月のことも……」

「残された歳月？ それは何です。まだまだ若いじゃないですか。第一、何故自分は無器用だと決めて掛かる。最初から自己否定して何が出来る。世の中には器用だから上滑りすることもある。無器用だから出来る仕事もある……そう思いませんか」

津坂は張り詰めた緊張を抜くように話題を変えた。

「私はね、武者小路実篤という人の書が好きでね。手元にいくつか持たして貰ってるが、調布にある記念館に行くとき、底の抜けた硯があるんだ。硯の底が抜けるほどあの人は書いたんだよ。書いて書いて、それであそこまで行ったんだね。私が当代に望みたいのはそこなんだ」

津坂院長の誠実な人柄は阿紀にもよく分かった。主張するところもよく分かる。分かった上で、何故わざわざ京都に呼び寄せてまでこんな話をするのかが分からなかった。

その疑問を阿紀は率直にぶつけてみた。

「私からあの方に、今のお話の趣旨を話せ、とおっしゃるのでしょうか」

「いや、彼には手紙で書いてやった。電話が来て長々と話もしたからもういいのです。ただ、貴女にも知っておいて欲しかった。何と言っても今の彼には貴女の影響が一番大き

いからね」

「そんなことはありません。先生のこと、お父上代わりに思っているとおっしゃっていました」

「私など、とてもあのお父上に適うものじゃない。……そう、彼そう言っていましたか」

津坂はいかにも嬉しそうに笑った。笑うと目元に童児のようなあどけなさが浮かぶ。

「私も彼のことは子供のような気がしてならない。だから要求もつい厳しいことになるのです。正直なところ囲碁を通じて私は先代に惚れたのです。これは男でないと分からないかも知れないが、何としても彼にお父上の遺志を継いで欲しいんだ」

「浅谷窯の伝統をですか」

「出来ればね。よしんばそれが不可能としてもお父上の遺志だけは継いで欲しい、継いで立派な陶芸家になって欲しい。これは彼に会って益々強くなった。彼なら継げる。成し遂げられる。……その為には出来るだけのことはさせて貰うつもりです」

「今の私の立場では何と言っているのか分かりませんが、有り難いお言葉だと存じます」

阿紀も素直に頭を下げた。

気がつくとき、津坂は座り直していた。

「……？」

「阿紀さん、どうか耕之輔君をよろしく頼みます」



改まって、畳に両手をついて頭を下げる津坂に、阿紀は思わず涙ぐんでいた。

「とんでもございません。どうぞ、そんな……お上げ下さい」

「……よろしく、お願いします！」

津坂は繰り返しながら、その語尾は震えていた。その直情が阿紀の胸底をえぐる。

「どうかもう……お上げ下さいませ」

阿紀は促したが、津坂は涙の顔を隠そうとするのか、なかなか頭を上げない。阿紀は不思議なものでも見るように津坂の頭を見据えていた。見据えながら涙で何も見えてはいなかった。

アルコールが回ると津坂院長の声は更に大きくなっていった。

「昨夜はなかなか寝付かれなくてね。あんたが変な女だったらどうしよう、どうして彼に諦めさせよう、なんて考えてね。……性悪な女だったら断固反対、断固撃退するつもりだった」

「私、危ないところでしたのね。それで、とにもかくにも関門は通過したのでしょうか」

「通過どころか、耕之輔君に渡すのが惜しくなった。どうです今からでも遅くはない、乗り換えませんか」

「何号にしましょう」

「いや参った、参った」

上機嫌の津坂は、阿紀の盃になみなみと酒をついだ。

「今夜失敗すると大変なことになりますから」

「またそれを言う……そんなに彼のこと好き？」

「ハイ」

阿紀も酔いに任せてぬけぬけと言った。

「僕もあの男は好きだ。とんだライバルが出現して、今夜も眠れそうにないな  
旨そうに盃を空けると、初子のことを言った。

「あれじゃ耕之輔君が可哀想だ。知ってますか彼女のこと」

「いいえ、お会いしたことはありません」

「あんなのことを泥棒猫と言ったらしいね」

「事実、違いありませんから」

阿紀も肩の力を抜いて話が出来た。親に話せないことも、叔父には話せる、そんな気楽さである。

「これからも何かと迷惑掛けると思いますが、よろしくお願い致します」

女主人が加わると座敷は更に賑やかになる。

「あんたもこの人の爪の垢を煎じて飲むといいんだ」

「ほんと、少しは奇麗に若返るかしらね」

「そいつは無理だろう」

「先生、青島さん呼びますよ」

「青島!? ……あんな奴が怖くて院長が勤まるか」

運転して来た看護婦のことらしかった。

「紫門」を辞去したのは十時近くだった。

阿紀は快い酔いの中で今夜のことは生涯忘れないだろうと思った。また忘れてはならないとも思う。

駅前のろうそく型のタワービルが黒い夜空ににじんんでいた。

「先刻のことは、当分彼には内緒だよ」

「何のことでしょう?」

「援助の話。今の彼には自力を出しつくすことが必要だ」

酔っているようで芯は覚めていた。

阿紀はバスタブにお湯を張りながら浮き浮きしていた。直接には津坂院長に気に入られたことが嬉しかった。津坂には不思議な魅力がある。彼に会ったことで、住む世界が一つ広がった気がしていた。

耕之輔と共通の知り合いを持てたことも阿紀の気持ちを和ませる。耕之輔が津坂に魅せられたのもよく分かるし、津坂の素晴らしさがわかる耕之輔に信頼が置けた。そんな津坂

が後援してくれるとなると浅谷窠のこともうまく行きそうな気がする。

阿紀は衣擦れの音鮮かに帯を解いた。胸の辺りに汗の涼しさがあった。足袋を脱ぎ、下紐を次々に解いては投げ出していく女の幸せを感じていた。着物をハンガーに掛けて吊す。

阿紀は鼻歌でも出そうな気分で洗面台の前に立った。

「鏡よ鏡、世界中で一番……」

言ってから、独り可笑しくなつてククツと笑った。

目を覚ますと、雲一つない冬晴れだった。

昨夜のことを夢のように思い出しながら紬の着物を畳んでみると、電話が鳴った。津坂からで、今朝の予定を訊いていた。

徳島には夕方入ればよい。

「それなら、昨日の青島に京都を案内させましょう。そちらで待っていて下さい」  
用だけ言うのと切れていた。津坂の、夜とは違うせつやかな顔だった。

青島典子は時間かつきりにやって来た。

「何処が御覧になりたいですか」

「お忙しいのに、申し訳ありません」

阿紀が恐縮するのに、典子は押し付けがましくと詫びた。

「院長の悪いところです。放って置けないですね。それに、私にも平生忙しい目をさせ

てるからって、暇をくれたわけです。車の運転が私の趣味ですので」

「素敵な先生ですね。昨夜お会いしただけで魅了されてしまいました」

「あれにみんな欺まされるんです。私もそのひとりですけど。今にお節介な電話をしてきますよ」

そう言っているところに電話が鳴ったので二人して笑った。

「今、鴨川沿いを平安神宮へ向かっています。こちらは私に任せて、シッカリ患者さんを診て上げて下さい、どうぞ」

「うるさいッ」と津坂の怒鳴る声が隣の阿紀にまで聞こえた。

「申し訳ありませんが、お昼はもう一度だけ院長とつき合ってやって下さい。徳島にはこの車でお送りすることになっていますので」

「まあ、どうしましょう」

平安神宮は冬の平日とあって閑散としていた。

池に浮かぶ浮橋に差し掛かった時、典子の脚が止まったような気がして阿紀は思わず振り返った。

「……？」

典子の顔が蒼白に見えた。まずい処でまずい人に出会ったという感じである。

橋の中央にスラックス姿の大柄な女が池を覗き込んでいる。

「どうかなきいました？」

「いえ、何でもありません」

典子は先に立って歩き出していた。

女は池の面をじっと眺めて動かない。

栖鳳池に架かるこの橋は中央に泰平閣と称する二層の優雅な橋殿を持っている。女はその突き出した欄干の手すりに身を寄せている。

屋根の蔭で上半身が暗く、そのくせ変に揺らめくものがあって何か心許なさをただよわせていた。それに比べ腰から下が冬の陽を受けて如何にも肉感的だった。

近づいてみると女は眼下に群がる鯉を見ているのだった。上半身が変に揺らめいて見えたのは水面の照り返しだった。その照り返しは天井にも映えている。

阿紀と典子は女を避けて北側の手すりに寄った。今歩いてきた辺りが池越しに一望出来る。南面を見る眺めは冬と言っても如何にも明るかった。

「あの枝垂れ桜が、谷崎潤一郎の『細雪』に出てくる有名な桜ね」

阿紀が言うのに、典子が、

「あら、じゃ良く見ておくんだった。と言っても、その『細雪』って何です？」

と惚けたことを言う。

阿紀は女のいる南側へ向かった。典子も困ったと思ったが、まさか、お互い坂戸耕之輔

の妻と愛人であることは分かるまい、と何処かこの奇遇を楽しんでいるところもあった。

初子、阿紀、典子と並んで池を覗き込む形になった。

「あッ、鯉」

数十尾の鯉が餌を求めて円い口を開けてうごめいていた。それが如何にも卑しく浅ましい姿にも見えた。

「あら、空っぽだわ」

典子が小銭入れを手にして言った。見ると「鯉の餌二十円」と書かれた木箱が備えてあるが中は空だった。

「そうなのよ。可哀想な鯉たち……」

初子が言った。言ってから典子を見て「おや」という顔をした。典子は無視して鯉の群れを見ている。

阿紀はそんな緊張を解くつもりで軽く言った。

「私の住んでいる小千谷って町は、錦鯉の産地なの」

女がキツとした目で阿紀を振り向いた。

「錦鯉の会館があつて、そこへ行くと一メートル近い鯉もいるの」

「そんなに大きいと、不気味でしょうね」

言いながら典子は女と阿紀の間へ割って入るように場所を移した。

「百万円もするのがいるんですって？」

「もっと高価なものもあるらしいわよ」

その時だった。初子が思いがけないことを口にした。

「そんなの鯉こくにして食べたら、さぞ美味しいでしょうね」

悪意のある言い方なのは阿紀にも分かった。

「行きましょう」

典子が不快そうに言って歩き出した。

「お待ちなさいよ」

初子が典子を呼び止めていた。高飛車な喧嘩を売る言い方だった。

「貴女、お会いしますよね」

「さあ、私には覚えがありませんけど。私頭が悪いものですから」

典子も負けてはいない。その分ひと言多かった。

「その言い方で思い出したわ。津坂病院の看護婦さんね」

「そうですけど……それが何か」

「私のこともうお忘れになりましたの？」

「患者さんは大勢いらつしやいますから……」

「私は覚えているわよ。貴女に痛い点滴の針なん本も打ち込まれたから」

「私の注射下手は有名なんです」

「もう思い出したでしょう？」

「いいえ、……」

「じゃ、お教えしましょう、私は……」

「行きましょう」

典子は強引に阿紀の手を取って立ち去ろうとした。

初子はその前に立ちはだかった。

「山口の坂戸初子よ」

言うてから、ちらと横目で阿紀の反応を窺っている。

「……！」

今度は阿紀の顔色が変わる番だった。息がつまりそうだ。

「だからどうなのよ」

「やっぱり。私、そっちの人に話があるのよ」

「そっちに有ってもこっちにはないの！」

典子は初子を押し退けていた。初子はよろめき、橋楼の床がボコツと響いた。

阿紀はどうしていいか戸惑うばかりだ。

「御免なさい。大失敗……また院長先生に叱られるわ」

小走りに急ぎながら典子は何回も阿紀に詫びた。

後ろで初子の声が聞こえたような気がしたが、二人は振り向かなかった。

御守りや御札を売っている「出口」を抜けても阿紀の鼓動は治まらなかった。

一方、初子も脳天に昇った血を戻しかねたまま、その場に呆然と立ち尽くしていた。あの女だったか、という怒りと、その満ち足りた表情にかいま見える充実への嫉妬がない混ぜになって足が動かない。

美杉を呼び出してみようかと思う。

公衆電話を求めて歩き出した時、急ブレーキのきしみとともに、罵声が浴びせられた。

「馬鹿野郎ッ、死にたいのか！」

初子は信号の存在を忘れていた。

その頃、阿紀と典子は車を駐車場に置いたまま、直ぐ南の国立近代美術館のテイルルムに来ていた。総ガラスの向こうに掘割りを見下ろせる明るいスペースだった。

「御免なさいね」

典子は改めて謝った。

「とんでもない。貴女が気になさることないわ。余計な気を遣わせて御免なさい」

阿紀も心から謝った。

「でも、会っておいで良かったと思っているの」

「それは嫌な女よ。私たち働いてる者を見下すので、ナースの間の評判も最低だった」  
「もう、いいのよ」

阿紀は運ばれてきた濃いコーヒーをストレートで飲んだ。気付け薬には持ってこいだ。  
阿紀は話題を変えようと、典子のことを訊いた。

「青島さん、お子さんは……？」

「二人、上が娘で下が息子。もう中学の三年と二年」

「羨ましいわ」

「なんのなんの……母親を馬鹿にしくさって、困ったものですよ」

「夜勤もおありでしょうから大変ね」

「うるさくなくて丁度いいんじゃないんですか。二人で適当にやっているみたい……」

「御主人さまは……？」

「昨夜、お会いになったでしょ」

「えッ……ウソッ！」

「そう、嘘。でも院長、そう人に言ってるのよ。うちの子の本当の父親だ、って。私にも言ったわ。俺の愛人になれ、庶子として認めてやるからって」

「まあ……」

「だから私も言っちゃったの。そう思うんなら抱いてみる、って。あの子たちの父親は、もう少しマシな男だって」  
堀の向こうを見て話す典子の目に光るものがあつた。

「うちの院長ってそういう人なんです。だからシヤクだけど逃げるに逃げ出せないの」

典子は立ち上がるとバッグを抱えてトイレに立った。阿紀にも典子の胸の内がよくわかる。あの津坂ならあり得る話だ。

阿紀は耕之輔の姿を津坂に重ねて見ていた。そしていつか暖かい流れの中に取り込まれている自分を感じていた。

古い瓦の連なりの向こうに蹴上の都ホテルの姿が如何にも優雅だ。

「もう、他を回る時間がなくなってしまったわ」

典子が時計を見て言った。

「いいんです。京都にはまた何うこともあるでしょうから」

「車を取って来ますからここで待って下さい」

「私も一緒に出ます」

典子を追ってレジへ急いだが、何時払ったのか、もう勘定は済んでいた。

「御免なさい。田舎者は気が利かなくて……」

「いいのよ、院長先生に請求するんだから。ケーキも食べたと言ったら院長もっと喜んだでしょうに……」

阿紀は美術館の売店で香月泰男の絵ハガキを買って典子の車が来るのを待った。

「お待ちどうさま」

阿紀が乗り込むと、典子は病院に電話を入れていた。

「……高価なケーキも食べましたから。そう二つずつ。どうも御馳走さまでした。大きな御世話です」

と、阿紀にウインクしてくる。

「それ以上太ってどうする気だ、ですって」

高台寺の津坂病院は十分とは掛からなかった。

その日の定食も病院近くのトンカツ屋だった。

「耕之輔君もこの味が痛く気に入ってね」

「先生がそう決めて掛かっているだけでしょ」

「私は医者だ、顔を見れば何でも分かる」

「じゃ、私が今何を考えているかお分かりですね」

「顔一杯に、このケチ爺、と書いてある」

「あら、まんぎらのヤブ医者でもないんだわ」

「私ほどの名医は京都不探しても滅多におらん」

「人が言ってくれないから、自分で言ってる」

津坂と典子の漫才が一区切りついたところで津坂が言った。

「逢ったそうですね。……申し訳なかった。こ奴が気が利かんから……」

「とんでもありません」

「でも安心したでしょう。ああいう女を見ていると、こんな女でもまだまだマシに思えてくるから不思議だ」

「あら、それ私のことかしら。……今に先生、セクハラで訴えられるんだから……」

芥子の効いたトンカツに、阿紀は鼻水をすすっていた。

食べ終わると、待っている客が並んでいて、立たないと気がひける店だ。

喫茶店の前まで来ると、典子が車にガソリンを入れるからと去って行った。気を利かしたのかも知れない。

津坂院長は常連の気安さで奥のボックスにどっかりと腰を沈めると、水を運んできた主人に言った。

「今日は飛び切り美味しいコーヒーを頼む」

「飛び切り美味しい奴ね」

と主人も少しも動じない。

「そんなに美味しいんですか」

「期待しちゃ駄目。十年言ってちっとも進歩しないんだから」

「先生、聞こえてるよ」

「聞こえるように言ってるんだ」

主人が去ると越後の話になった。

「新潟には学生時代に行ったきりだ。変ったろうな」

「一度、是非いらっしやって下さい。私の処には何もありませんが、御案内する処は色々あります」

阿紀もただの挨拶ではなかった。耕之輔と三人で新潟の田舎を歩く幸せを思っている。

「耕之輔君から会津八一先生の書の話の話を聞かされてね。是非まとめて見たいと思ってるんだ」

「私も先日拝見してきました」

「雪の日だろ？ 風花が舞って、ふたりで観りやそれはいいだろうさ」

「ま、お話になったんですか」

「お話になるんだなあこれが……ぬけぬけと舞台効果入りで」

阿紀は、男同士どこまで話しているのだろうと顔を赤らめた。

「不勉強で私、書のこととはよく分かりませんの」

「逃げたな。……なに、これから耕之輔君が教えてくれますよ。私は彼の目を信用してるんだ。目が確かなら手は努力次第でついてくる。彼の陶芸も同じことだと思ってる」

阿紀はずっと気に掛っていることを思い切って訊いてみた。

「やはり今の窯で、伝統に従ってやって行くべきなのでしょうか」

「私には分かん。彼が決めることだ。ただ私は、萩を逃げるべきでないと思っている。

人間逃げてはいかん。どんな恥辱屈辱にも耐えてこそ、人も芸も磨かれるんだ。逃げるのはいかん」

「分かりました。私に何ほどのお力添えが出来るか分かりませんが、出来るだけお力になれるよう努力してみます」

主人がコーヒーを運んできた。

「はい、飛び切り美味しいコーヒー。院長にはお嬢さんのカスで入れておいたからね」

「この野郎、今度痛い注射を打ってやる……」

「子供じゃあるまいし、注射が怖くて、こんなヤブ医者に尊い命を預けられますか」

「尊い命はよかったな。お前さんが死んでひとりでも泣く奴がいるのか」

「知らねえな院長。これでも私が死ねば泣く女がゴマンと居るんだ」

「私は泣かないよ」

振り返るとカウンターで太った女房が笑っている。

「お前は女じゃねえもの」

「あら、そんなこと言っているの？」



「さあ、これで今夜が大変だ。赤チンでも用意しとくか」

津坂の物言いが周囲にまで広がっているのが、阿紀にもよく分かった。

夫妻が去ると、津坂が真面目な顔に戻って訊いた。

「しかし、貴女には染織の道があるでしょう」

一瞬何のことか分からなかったが、耕之輔の話の続きだった。

「私の仕事は元々趣味に毛の生えた程度のもんです」

「無理はいけない。彼は彼、貴女は貴女。それで助け合えないくらいならお互い何をやっても力にはなれないよ」

「……徳島でよく話し合ってみます」

「そうだね」

主人がカウンターの中から言った。

「先生、診察の時間いいのかい？」

津坂は時計を見ると、もう立ち上がっていた。

「こ奴は相手が美人だといつもこうだ、焼き餅は嫌だね。……青島がここへ迎えに来ますから、貴女はここで待ってて下さい」

「昨日から、本当に有り難うございました」  
挨拶をしている暇もなかった。

「また、ゆっくり会いましょう。……気をつけて行ってらっしゃい」

津坂院長は固苦しい挨拶は苦手らしく、後ろ手をあげながら逃げるように出て行った。

内儀さんが渋いお茶を運んでくれ、典子の車で徳島に行くのだと知ると、コーヒーをポットに用意してくれるという。

話題は津坂院長のことしかなかった。

「あれで、奥さんがお元氣だったら言うことはないんでしょうにね」

「御病氣なんですか、奥様……？」

「御存知ないですか。来年は十三回忌のはずですよ」

「これが又、院長に輪を掛けたいい奥さんでね。私も随分お世話になったもんです」  
カウンターから主人が口を挟んだ。

「じゃ、院長先生、今はお独りなんですか」

「そうなのよ。家政婦さんの話だと、今でも毎朝のお勤めは欠かさないそうよ」

「俺ならこれ幸いとすぐに再婚するけどな」

「あんたは大丈夫。私の方が絶対長生きしてみせるから」

阿紀は、津坂が仏壇に向かってしている姿を想像出来なかった。

夫婦とは一体何なのだろう。まだ自分には良く分かっていないのかも知れない、と思う。世には様々な夫婦がいる。その姿形はそう変らないが、中身は天と地ほど違うものかも

知らない。数字に代えて計れないだけの話だ。

耕之輔と共に歩く意味を、もう一度じっくり考えてみる必要がある、と阿紀は思っていた。

「お待ち遠さま」

典子は明るい海老茶のジャンパーに着替えていた。

「どお、おばちゃん、似合うでしょう」

「少し派手なんじゃない？ もっとも近頃は年寄りほど派手って言うけどね」

「年寄りとは何よ。……仕方ないでしょ、中学生の娘と共用なんだから」

女ひとり歩く典子の開き直りは爽やかだった。